

巻頭言

秋田大学臨床心理相談室の第二時代

教授 高田 知恵子

秋田大学臨床心理相談室の創始者である鶴光代先生が2007年3月に、ご退職になりました。鶴先生は心理臨床の核となる種を秋田の地にしっかりと蒔いてくださいました。大学院生の指導に情熱を注ぎ、教職員のまとめ役でもいらっしゃいました。また現在も日本臨床心理士会、日本心理臨床学会での重責を担い、日本の心理臨床の水準を高めることに努力なさっていらっしゃいます。そのような素晴らしい先生が当相談室を育ててくださったことは私どもの誇りでもあります。

2007年3月に高田知恵子が赴任し、2007年4月からは八巻秀教授、清水貴裕講師がスタッフに加わり秋田大学臨床心理相談室は新たな体制で再出発しました。さらに懸案であった相談有料化が実施され、名実ともに秋田県の第一線の臨床心理相談室として、地域心理臨床の重要な役割を担うことになりました。相談有料化によるクライアントの方への影響を心配しましたが、幸い好意的に受け止められ、相談件数も増加し、相談内容も多岐にわたっております。他機関専門職からの紹介も増えております。

心理臨床への世の中の関心は年々高まっていることを実感します。1995年文部省（当時）がスクールカウンセラー活用調査研究を開始した時、初代スクールカウンセラーとして勤務した筆者は「臨床心理士って何ですか？」という教職員の方からの素朴な質問を受けることが多々ありました。今では、スクールカウンセラーになりたいという多くの学生が臨床心理士養成大学院を受験しています。社会の関心が高まれば、それだけニーズも複雑多様になり、心理臨床活動についての注文や評価も厳しくなります。その時代、その地域の特性に合った心理臨床活動を行っていく必要があります。そのために、その時代、地域等についてのアセスメントを常に行い、臨床心理士に求められることは何か、臨床心理士としてどの部分にアプローチしたらよいか、他の専門家との連携をどのように行ったらよいか、社会に向けてどのように発信したらよいか、等々について主体的に考え、判断し、行動することが必要となります。相談室の中で心理臨床をじっくり行うことともに、地域に出向いて他の専門家と連携し、発信することが今後ますます重要になります。このような幅広い心理臨床の行える専門家を養成するのが秋田大学大学院であり、臨床心理相談室です。

私どもは、鶴先生の築いてくださった礎の上に、秋田大学臨床心理相談室と秋田県の心理臨床をさらに発展させていきたいと決意を新たにしております。関係する皆様には、今後の臨床心理相談室のプロセスを見守って頂き、ご指導頂きたいと考えております。